

第2回日本チェロ協会総会報告

去る6月24日(土)14:00から、山梨県山中湖の「ペンション・セロ」で日本チェロ協会の第2回総会が開催されました。

総会に先立ち、13:30より評議員会が開催され、その他議案に関して2件を総会へ提案することが承認されました。

続く総会は、岸本事務局長代行の進行により、堤会長の挨拶で始まり、評議員8名と会員18名の計26名に事務局2名が出席のもと、活発な論議がなされ、下記の議案が承認されました。

総会式次第

●日本チェロ協会第2回総会次第

2000年6月24日(土)

会場:ペンション・セロ ゴーシェホール

1. 開会の挨拶
2. 会長の挨拶(堤剛会長)
3. 議長選出
4. 議題
 - I. 1999年度活動報告
 - II. 1999年度決算報告
 - III. 会計監査報告
 - IV. 役員改選
 - V. 会則改定(協会事務局所在地、機関紙の発行、会費の徴収)
 - VI. 2000年度活動計画(案)
 - VII. 2000年度予算(案)
 - VIII. その他議案
5. 閉会の挨拶(中島顕副会長)

議事抄録

I. 「1999年度活動報告」の要旨。期中に事務局移転問題が生じ十分な活動ができなかった。チェロ・サロンは初めて関西で開催、東京では3回開催し、各回とも設定したテーマを達成した。マスタークラスは2回開催し、設立当初からの希望であったヤーノシュ・シュタルケル氏を招聘することができた。

●日本チェロ協会1999年度活動報告

自1999年4月1日 至2000年3月31日

1. 会報の発行

- 1999年6月14日:第7号会報発行
- 10月15日:News Letter 発行
- 12月18日:第8号会報発行
- 2000年3月14日:News Letter 発行

2. チェロ・サロン

- 1999年5月16日:関西チェロ・サロン開催、「APAとの共催」
(於、心斎橋国際楽器ホール)



5月16日:河野文昭氏チェロ・サロン開催
(於、カザルスホール)

11月20日:山崎伸子氏チェロ・サロン開催
(於、カザルスホール)

2000年3月18日:菊田雅治氏チェロ・サロン開催
(於、カザルスホール)

3. マスタークラス

- 1999年10月5日:ヤーノシュ・シュタルケル氏
(於、カザルスホール)
- 12月18日:クリストフ・ヘンケル氏
(於、ヴォーリズホール)

4. 評議員会

- 1999年4月18日:第1回評議員会
(於、お茶の水スクエアC館)
- 11月16日:第2回評議員会
(於、お茶の水スクエアC館)

5. その他 1999年6月:会員名簿作成、配布

II. 「1999年度決算報告」は児玉事務局長より、

III. 「会計監査報告」は三木会計監査よりそれぞれ報告され、Iとともに一括して拍手で承認された。

IV. 役員改選は、役員の立候補、推薦がなく、5月15日の評議員会で討議された下記案が提出された。

- ・事務局移転にともない、事務局所在地の者が評議員・事務局長になるのが望ましいので、児玉眞氏が退任し、サントリーホールの岸本健二を推薦。
- ・前回総会時にも提案のあった、アマチュアの立場で会を推進する方が必要との観点から、「1000人のチェロ事務局長」として会を成功裡に導き、培われたネットワークをお持ちの松本

巧氏を推薦。
・その他の評議員に関しては、チェロ協会の基盤が確固としたものになるまでは、現行体制を維持し、創立時の評議員の方々の推進力をいかしたいという会長の提案で、(前述の児玉氏を除き)全員留任。
以上の案を検討し、承認を得た。
なお、堤会長より日本チェロ協会設立時から今日まで大変ご尽力いただいた、前事務局長の児玉真氏、事務局の箕口一美さんに対し謝意が述べられた。

- 日本チェロ協会2000／2001年度役員
自2000年4月1日 至2002年3月31日
- 会 長 堤 剛
 - 副 会 長 中島 顕、堀 了介
 - 書 記 山崎伸子
 - 評議委員 上村 昇、荻田雅治、倉田澄子、河野文昭、
斎藤建寛、松本巧、毛利伯郎、岸本健二
 - 会計監査 三木隆二郎、藤田正厚

V. 会則改定は、「移転に伴う協会事務局の変更」「ホームページ開設に伴う機関紙の発行回数変更」「事務の簡素化を図るため、会費の徴収時期を変更」の3項目を提案し承認された。
会費の見直しに関する意見が提出され、毎年適正な会運営の観点からみていくことが、確認された。

●日本チェロ協会会則改定
自2000年4月1日
1999年11月24日制定の日本チェロ協会会則を下記のように改定する。

1.2条所在地
(現会則)
協会の本部を東京都に置く。
協会事務局をカザルスホール企画室・アウフタクト内に置く。
(改 定)
協会の本部を東京都に置く。
協会事務局をサントリーホール内に置く。

2.9条－3.2項事業－4.機関紙の発行
(現会則)
機関紙の発行(年4回)
(改 定)
機関紙の発行(年数回)

3.10条－6.1項財政－7.会費
(現会則)
会費(入会月翌月から1年間)
(改 定)
年会費(入会時に支払う。翌年からは、毎年所定の時期に支払う)
＊尚、現会員は、2000年度は移行期とし、2000年度年会費は、
・4月～6月入会者は、総額
・7月～9月入会者は、年会費の3／4
・10月～12月入会者は、年会費の2／4
・12月～3月入会者は、年会費の1／4 支払う。
2001年度以降、年会費は毎年所定の時期に支払う。

VI. 「2000年度活動計画」は、基本的な活動方針は継続することを確認するとともに、重点項目として昨年できなかったホームページの開設を行い、情報のタイムリーな提供を行えるようにした

日本チェロ協会 1999年度 決 算 書				
【収入の部】		(単位：円)		
項 目	1999年度予算額	1999年度決算額	摘 要	
会 費	1,500,000	1,218,000	入会金 10,000／会費 1,208,000	
雑 収 入	10,000	9,841	受取利息 637／郵送料 9,204	
前 年 度 繰 越 金	1,611,943	1,611,943		
計	3,121,943	2,839,784		
【支出の部】		(単位：円)		
項 目	1999年度予算額	1999年度決算額	摘 要	
会 報 作 成 費	656,250	393,750	@131,250×3回(第6回、7回、8回)	
通 信 費	180,000	145,630		
便箋、封筒などの制作費				
総会委員会諸経費	200,000	114,640	委員旅費	
事 務 諸 経 費	100,000	22,156		
名 簿 作 成 費	100,000	170,877		
会 員 証 制 作 費	10,000	4,913		
事 業 費 (マスタークラスなどの開催費)	600,000	161,868	マスタークラス謝礼(ヘンケル) チェロサロン	
ホームページ開設運営費	100,000	0		
小 計	1,946,250	1,013,834		
2000年度への繰越	1,175,693	1,825,950		
計	3,121,943	2,839,784		

いとる案が承認された。

各意見として、「ホームページ開設にあたっては、会員の方の協力をいただきたい」「会報へ掲載するための情報を事務局へよせてほしい」「名簿に関してはもっと簡素なものでよいのでは」等があり、今後の運営に生かしていく。

●日本チェロ協会2000年度活動計画

自2000年4月1日 至2001年3月31日

1. 基本的な活動方針は継続

2. 第2回総会、サマーキャンプ開催

6月24日(土)、25日(日)

3. 会報の発行、ホームページの開設

- ① 年4回発行を、年3回発行にする。
7月、11月、3月
- ② ホームページを開設し、会報発行回数減による情報をカバーするとともに、タイムリーな情報提供を行う。
9月開設

4. チェロサロンの開催

- ① 本年度は、サマーキャンプでチェロアンサンブルが開催されるため、3回の開催とする。
9月、12月、3月
- ② 会員の方から、石島栄一さん、田中洋子さんにお世話役としてのボランティアをお願いする。

5. マスタークラスの開催

- ① 年2回程度開催する
1回目：9月14日(木)17:00～
ボリス・ペルガメンシコフ氏
(場所：サントリーホール小ホール)
- 2回目は、会員間の情報交換、音楽事務所の協力により

候補者選定。

VII. 「2000年度予算」は、ホームページ開設費用を伴う案が承認された。総会が開催されない、2001年度予算は評議員会に委ねる旨が確認されるとともに、総会が開催されない年度の予算決定について、次期総会で会則に盛り込むことが提案された。

VIII. その他議案として評議員会より2案が提案され、それぞれが松本巧氏、三木隆二郎氏より詳細説明があり、承認された。

●その他議案

1. 1000人のチェロ・コンサート実行委員会事務局長でもある

松本巧氏より説明。第1回神戸チェロフェスティバル(第2回1000人のチェロ・コンサート)を日本チェロ協会として後援する。

日時：2001年7月25日～29日

場所：神戸市

内容：第2回1000人のチェロ・コンサート、マエストロによる公開レッスンとコンサート、チェロ・アンサンブルコンテスト、チェリスト・ミュージックキャンプ

主催：神戸チェロフェスティバル実行委員会

2. 第一生命保険相互会社に勤務の三木隆二郎氏より説明。

チェロサロンの会場として、2001年秋に完成の晴海第一生命ホールのリハーサルルームを提供いただける旨の申し出をうける。サントリーホールのリハーサルルームと併用する。

時期：2001年秋から

場所：東京都中央区晴海1丁目

以上 事務局長 岸本健二

2000年度 予算書

【収入の部】

(単位：円)

項 目	1999年度決算額	2000年度予算額	摘 要
会 費	1,218,000	1,300,000	
雑 収 入	9,841	10,000	
前年度繰越金	1,611,943	1,825,950	
計	2,839,784	3,135,950	

【支出の部】

(単位：円)

項 目	1999年度決算額	2000年度予算額	摘 要
会 報 作 成 費	393,750	400,000	@131,250×3回
通 信 費	145,630	180,000	会報発送など
便箋、封筒などの制作費	—	100,000	レターヘッド・訂正シール作成
総会評議委員会諸経費	114,640	400,000	総会費用
事 務 諸 経 費	22,156	100,000	
名 簿 作 成 費	170,877	170,000	
会 員 証 制 作 費	4,913	50,000	
事 業 費	161,868	500,000	マスタークラス
ホームページ開設運営費	—	300,000	ホームページ開設
2000年度への繰越	1,825,950	1,088,950	
計	2,839,784	3,135,950	

サマー キャンプ レポート

総会に続いて、ペンション・セロにて、サマーキャンプが行われました。24日の総会終了後、自由時間をはさんで、17:30より懇親会、その後倉田先生と河野先生の2組に分かれてアンサンブルの練習～自由合奏となり、チェロの音色は深夜まで山中湖畔の森の中に響きました。

翌25日は初級・中級に分かれたクリニックの後、前日のアンサンブルの成果を発表し、熱気にあふれた二日間は終了しました。

参加された皆さんの声をご紹介します。

日本チェロ協会第2回総会に参加して

松本 巧(R-78)

前日に神戸から東京入り、新宿バスターミナルから2時間少して目的地、山中湖の「ペンション・セロ」に到着しました。都心から予想外にスムーズに到着することができました。

ペンションの玄関には、今年から事務局をバトンタッチしてお世話をいただいている、サントリーホールの高鳥道子さんが、続々やってくる参加者を迎えてくださいました。ほぼ定刻にペンション内の「ゴーシュホール」で日本チェロ協会第2回総会が始まりました。

新事務局長のサントリーホールの岸本健二さんの司会、堤剛会長を議長に、活発な意見討論とともに、議事はすべて満場一致で可決成立しました。前任の事務局であったカザルスホールの児玉真さん、箕口一美さんのお二人も同席して下さり、参加者よりねぎらいと感謝の拍手がありました。

さて、夕食までは自由時間といいながら、二つに分けたグループの私が属する倉田澄子先生班は、知らぬ間に個人練習

が結局グループ全体練習となり、ラヴェルの難曲《亡き王女のためのパヴァーヌ》のチェロ十重奏に取り組みました。大阪から駆けつけてくださった斎藤建寛先生のお力添えもあり、なんとか曲に仕上げることができました。

夕食は1時間の予定が、ビールやワインが少し入ると、お互いが旧知の仲間のようにいろいろと話が絶えず、夜の練習開始が約30分ずれ込みました。

倉田班は自由時間を有効(?)に利用したおかげで、食後の練習を9時頃に切り上げることができました。ペンションの居間では堤先生をはじめ、手のあいた方々が集まり始め、尽きないチェロ談義がワインを片手に始まっていました。また、「ゴーシュホール」では同好の士たちが、居間のビールやワインに目もくれず、夜中の12時近くまで持参してきたアンサンブル楽譜を片っ端から初見大会で楽しんでいました。

当日急患が入って、予定より遅い午後10時頃に到着された杉浦夫妻と7カ月の赤ちゃん、令旺君が、そして午後11時半にはアトランタから当日帰国された石島栄一さんが到着し、予定した全員が無事にそろいました。石島さんが食事を終えるのを待ってゴーシュホールでは、山崎伸子先生持参のベートーヴェンのソナタ第3番の変奏チェロ六重奏が、山崎先生ご自身、倉田先生を交えて4人のアマ参加者で始まりました。ベートーヴェンの後も次から次へと出てくるアンサンブルに、お二人の先生も嫌な顔一つなさらず、積極的にお付き合いくださいました。時計を見るともう午前1時になっていました。

翌朝の目覚めも爽やか、朝食を早々に済ませ、9時からは初級、中級に分かれてのクリニックです。中級クラスでは堤会長が「企業秘密」なる秘伝の技までわれわれにご披露くださり、これこそ「日本チェロ協会」の会員にのみ許された大特権! 素晴らしいクリニックでした。

さて、いよいよ最後の仕上げのアンサンブル発表です。予定の2時間半を約30分もくい込んで、3時間近くに及びました。

倉田班は練習の成果よろしく、一発やり直し無しでなんとか倉田先生のお許しいただけるレベルの演奏ができました。河野文昭先生の班は、山崎先生のお力添えで少数精鋭、すばらしい響きを残してくれました。

＊

24時間足らずの本当に短い限られた時間でしたが、実に大きなお土産、成果をいただきました。梅雨空の小雨模様もまったく気にならないほど、中身の充実に参加者全員が打ち解けていました。

また、ふだんはチェロの世界では雲の上の先生方が、まるで

総会後の懇親会風景(右頁とも)



自分たちの合奏仲間のような存在にまで降りてきてくださり、実に気さくに接してくださったのが、今回の成功の礎だったように思います。

堤会長をはじめ、倉田先生、河野先生、斎藤先生、山崎先生、そして陰で準備を進められたこられた児玉さん、箕口さん、さらに慣れないながらに立派に成功に導かれた新事務局の皆さん本当にありがとうございました。次なる日本チェロ協会の広がりが見え始めた山中湖のイベントでした。

劣等生のチェロ弾き

福田能明(R-79/アンサンブルB組)

日本チェロ協会主催の『第2回総会兼サマーキャンプ』(6月24日・25日)が山中湖湖畔の「ペンション・セロ」で開催されました。サマーキャンプではチェロ・アンサンブル教室がA組とB組に分かれて行われましたが、これからB組の練習や本番の風景などについてご報告いたします。

まず、自己紹介とメンバー紹介からさせていただきます。小生は、20歳のころLPでシュタルケルのパッサカの無伴奏チェロ組曲とコダーイの無伴奏チェロソナタを聴いて感動し、45歳からチェロを習い始めた者です。約4年半経ちまして易しい曲ならば、何とか弾けるようになった今日このごろですので、今回のすばらしかった練習や本番の風景については、第一パートの三木さん、第二パートの谷口さん、第三パートの岩瀬さんのいずれかの方が報告されたほうが適任で、かつ密度の濃い内容になったのではないかと思います。ポイントがずれた報告になるかもしれませんがご容赦願います。

ご指導いただきました先生は、指揮・音楽作り・指導兼第四パートを担当された河野文昭先生と、小生の右隣で第三パートを担当された山崎伸子先生です。4人の生徒に有名な先生が二人もついて、何とかまあ贅沢なことか……。曲は、フィッツェンハーゲン(1848-1890)作曲の《アヴェ・マリア》と《糸紡ぎの娘》の2曲です。

それでは、24日の夕食後から始った練習風景をご報告します。隣の別荘の居間をお借りして練習できるようになりましたが、夕食後のビールやワインが結構きいてきてほろ酔い気分でしたところ、事務局の岸本さんから「これから練習を始めます」と厳しい合図がありまして、隣の別荘に行きました。すると河野先生がす

でにテーブルや椅子を片づけておいてくださり、すぐに練習に取りかかることができました。河野先生が「それでは、《糸紡ぎの娘》の曲を通して弾いてみましょう」とおっしゃり、皆で弾き始めました。小生が音をはずすと、即座にニコニコと微笑みながらこちらを振向きます。何度か振向かれてようやく終了すると、すかさず小生の弱点を見抜かれて「第四パートの重音は難しいですか。(小生がうなずくと)そうですか。それでは、私は第四パートの上のほうを弾きましょう」と助け船を出してくれました。「第三パートから始まるこのタラタラという音は、糸紡ぎ器のカラカラいう音なので、第一や第二パートにもありますが、このメロディが出てきたら他のパートは少し押さえて、この音を聴くように弾きましょう」とか、「ここの和音はなぜこうしたんでしょうね。何となく他のパートの音とぶつかるような音は、作曲家が特に意図して書いた音だから少し強めに弾いて強調しましょう」などと、小生にも理解しやすく丁寧に演奏の仕方を教えてくれました。また、楽譜に書いてあるままのポジションで弾いていると、「ここは、このように弾くといひよ」と教えてくださった上に、練習を再開しその個所にくると、身体で合図をしてくれます。この練習の間、堤先生がそっとおいでになって、キッチンであの柔和なスマイルでご覧になっていたのも大変印象的でした。2時間あまり練習した後、思い出の記念写真を撮影終了しました。

さて、翌25日チェロ・クリニックの後、11時半頃からペンション・セロのゴーシュホールで、A組B組の順で成果の発表会がありました。昨夜の練習で《アヴェ・マリア》の曲にあるト音記号のCの音がとれないので、この音にたどり着くまでのポジション移動を河野先生が教えてくれました。しかし、簡単にはできなかったもので、「明日の本番までにできるかな?」と暗に練習しておくように宿題が出ていたものですから、A組の発表中、ずっと楽譜を見ながらポジション移動の練習をしていました。さて、いよいよB組の発表です。椅子と譜面台をセットしてまさにチェロを抱えて座ろうとしたときに、山崎先生が「これから出す音を想定してから弾くんですよ」とそっと耳打ちするようにアドバイスしてくれました。実は、25日の9時から初級と中級に分かれて行なったチェロ・クリニックの初級クラスの講師だった山崎先生に、「音程が分からないのですが、どうしたら分かるようになるでしょうか」と小生が質問したのに対して、先生が先ほどのように教えてくれたのです。そのことを本番開始直前にアドバイスされても急にはできませんが、とりあえず意識して弾いてみようと思いました。《アヴェ・マリア》《糸紡ぎの娘》の順で弾き、結果は、《アヴェ・マリア》のポジション移動はできたけれども、《糸紡ぎの娘》では音程の悪い個所で河野先生の例の“ニコニコ振向き”が数回ありました。他のパートの音や立派なホールの響きなど味わう余裕もなく、あっという間に終わった感じでしたが、音程の狂いはあったものの、脱落せずに最後までついていけた自分を「……」(この「……」は有森裕子選手の有名な台詞で埋めてください)。

最後に、イヤな顔もせずに一緒に弾いていただいたメンバーの皆様ありがとうございました。また、河野・山崎両先生、短い時間でしたが得たことがたくさんありました。今後、念頭において練習に励みたいと思います。本当にありがとうございました。それから、ペンション・セロのオーナー堀口ご夫妻、料理から楽しいお話までいろいろありがとうございました。





クリニック（初級）

大変充実した1泊2日のサマーキャンプでした。次回があればまたぜひ参加したいと思います。

サマーキャンプに参加して

永山恭子(R-173/アンサンブルA組)

この度のサマーキャンプでは、倉田澄子先生にラヴェルの《亡き王女のためのパヴァーヌ》を中心に、レッスンしていただきました。この曲をチェロアンサンブルで演奏するのは、ほとんどの方が初めてで、私自身、いざ楽譜を手にして、ふだんフランスものにふれる機会が少ない私にとって、多少の不安がありました。でも、レッスンが始まると、斎藤建寛先生にも加わっていただいて、ひとつひとつ丁寧に解決してくださいました。

レッスンは、まず音を出すこと。曲の雰囲気をつかむことから始まりました。最初のうちは、人の音を聴く余裕がなくて、10個のパートの重なり合った音が一齐に鳴るばかり。案の定、最後までなかなか通らず、とても苦労しました。そこで、大事な動き以外は落として、他のパートをよく聴くよう指示がありました。曲のつくりは、わりと分かりやすいのです。その点を注意することで、呼吸の取り方や音の入りのきっかけが、ずいぶん楽になってきました。

この曲は、印象派の曲らしく、ステンドグラスが、たくさんの光を浴びて、さまざまな色彩を織りなすように、途中、パートによっては、フラジオレットやシンコーション等、決して派手な動きではありませんが、メロディーの一方で、音色の変化等を感じるこ

クリニック（中級）



ができました。何度も合わせるうちに、10パートの中でも、同じ動きのパートとの呼吸もかみ合い出し、だんだんと、重厚な響きがホールに鳴り始めました。そして、この曲のクライマックスは、繊細なメロディーがどこことなく懐かしいように聴こえて、最後に弓の毛1本の響きを感じられるまで、消えていくのです。翌日の発表会での本番は、余韻までがホールの空気に包まれた後、みんなでここまで仕上げた喜び、熱心に指導してくださった先生方への感謝で、気付いたらみんなでお互いに拍手していました。

この曲を通じて私たちは、アンサンブルをする上で大事なことを、いくつか学ぶことができました。先生方に教えていただいて知ったこと、隣の楽器同士で響きあって分かったことを、自分たちがそれぞれの活動の場で生かすきっかけにできたらと思います。また機会がありましたら、この作品をもう少し細かな色彩にできるよう、弾いてみたいです。そして、また今回のようなチェロのキャンプがあったら、ぜひ受講させていただこうと思います。アンサンブルを通じての再会も楽しみにしております。

最後になってしまいましたが、私たちのパワー以上に熱心にご指導いただいた倉田先生、私たちの中で力強く支えていただいた斎藤先生にお礼を申し上げます。

堤剛先生のチェロクリニックに参加して

北村貞幸(R-160/クリニック中級)

今回は、ペンションセロの素晴らしい環境、奥様の特製パン、朝の味噌汁、おいしい水…、プロの先生方のご参加、などに引かれて、ふらふらと足を運んでしまいましたが、堤先生や皆様の前でチェロを弾くということの重大さ、本年度最大の危機に気がついたのは、実は朝食時に演奏の順番が発表された瞬間でした。いろいろ楽しいことばかり思い浮かべたり、チェロアンサンブルの課題曲に気を取られていたものですから…。加えて、前夜1時まで倉田先生や山崎先生も交えたチェロアンサンブル“狂演”で興奮状態、超寝不足。おいしい朝食をたら腹食べて、ウォーミングアップもなくトップバッターでいきなりもうまな板の上の鯉、窓際のサラリーマン（これは慣れている）なのでありました。

まず先生のお尋ね「あなたの問題は？」で、弓を返す時に音が切れてしまうという私の告白にひとしきりご指導。腕の円運動の極意を授かったのです！そしていよいよ持参したバッハのガンパソナタ第1番第1楽章を…頭の中は真っ白で覚えてませ〜ん。「8分の12拍子なので、一小節に4つの3拍子の塊で4拍子という2種類のニュアンスを感じて」との言葉に、なるほどフムフムもともと。でもこの曲に出合って30年、どうしてそういう風にちゃんと考えてあげなかったの？と結構自己嫌悪に陥る。

その後、熱心な受講者の方々の演奏、堤先生の素晴らしいご指導が（出演者以外には和やかな雰囲気の中で）続きます。「僕が弾くからちょっと曲に合わせて歩いてごらん…」「この部分ピアノ

はこういうことやってるんで、それに自然に乗って行くように」「クー
プランの演奏はフランス語で。楽器から出る音でなく向こうの方
から帰ってくる音を聴いて」といった具合。指で弦を抑えた時、指
と弦の間に空気があるようにといった禅問答もありましたね。だって
空気なんかある訳ないもん。でもおっしゃること痛いほど分かりま
す。(できるかどうかは別ですが)

ということで、白熱したクリニックはあっという間に時間が過ぎ
てしまいました。先生方、事務局の皆様、ペンションの堀口御夫
妻、本当にありがとうございました。宿題山積! お蔭様で、老後ま
で退屈することはなさそうです。

山崎伸子先生のチェロクリニック

末松 悦子(R-143/クリニック初級)

合宿の二日目、6～7人の生徒が山崎先生をぐるりと取り囲
んでクリニックが始まった。先生のレッスンを受けられるなんて、私
はすっかりあこがれの若い(?)音大生になった気分。

でもいつもはプロの卵を指導している先生なのだからきびし
いのでは…とはじめは全員、緊張で固まっていたところ、先生の
「何か聞きたいことがあったらどうぞ」という優しい声。その笑顔
に誘われて「弓の持ち方を教えてください」という質問が出た。
「えー? そんなに最初から?」と言いつつも、生徒のすがりつく
ようなまなざしに促されて丁寧に説明してくださった。当然、先生が
ひとりの生徒にかかりきりになってしまう。するとそれまでやじうま
見物をしていた倉田澄子先生と河野文昭先生が急きょ救援隊
に早変わりして、手分けをして全員をみてくださった。うーん、右
手はいつも悩みのタネなのよね。

そのうち「私は4本の指が全部弓に触れるように持つけど…」
「いや、ぼくの場合はやはり人差し指、中指方向に重心がかかりま
すね」「だらんと自然な形の手をそのまま弓に置けばいいのよ」と
先生方の議論が始まった。さらに斎藤建寛先生まで加わり、生徒

そっちのけで熱いバトル。いやはや自分の感覚を言葉で人に伝
えることのむずかしさ。長嶋監督のように「こう来た球をね、カーン
とバットに当てればそれでいいのよ」と単純に言えれば苦労はな
い。結局、エンドピンの種類、構えた楽器の角度の違い、手の大
きさや長さの差などがあることから、似た体型の人を参考にしな
がら自分で開拓していくのがよいという結論になった。

すっかり気分のほぐれた私たちは、ビブラートのかけ方や指板
に指を置いたときのひじの高さ、4ポジション以上に移行したとき
の手のかたちなど次々に質問を浴びせた。そんな中でみんなに
共通の悩みは左手の中指と薬指のあいだが充分に開かないこ
とである。

「小さいお子さんでは指のあいだに消しゴムをはさむこともあ
りますよ」という山崎先生の言葉に「あーら、私なんかそんなこと
で悩んだことないですよ」とある生徒が自分の左手を広げてみ
せた。驚くなかれ、まるでETのような彼女の巨大な手の中指と
薬指はいともやすやすと90度の直角に開くのである。これには今
まで何人もの生徒の手を見てきた百戦錬磨の先生方も「ぎょ
えー!」と驚嘆の雄たけびをあげた。思わず視線を落して見比べ
た私の短い指。こんなのあり? チェロにも指の長さのハンディ
制度を導入すべきだ……と私は断固主張する。

それにしても経済成長や利益追求の過当競争などは頭から
ぶっ飛んで、弦にあたる弓の角度がどうのこうの、この位置の親
指のあて方どうのこうのと、音楽に興味のない人が聞けば「アホ
クサ」と言われそうな話に身を乗り出して聞こうとするみんなの姿。
そしてその真剣な目は一様にキラキラと輝いており、私たちは男
性や女性という意識、年齢や職業という概念から解き放たれ、た
だひたすらひとりの人間として音楽の海を泳ぎ、そこから与えら
れる至福の空間を共有していた。そしてこのような一見世の中
の役にたちそうもないことに夢中になれる時間こそ、実はこころ
が豊かなひとときなのだとはしみじみ感じたのだった。

アンサンブル発表会



The World Cello Congress III

第3回ワールド・チェロ・コングレス感想記

岸本健二(日本チェロ協会事務局長)

“The World Cello Congress III”が、さる5月28日から、6月4日までアメリカ・メリーランド州ボルティモア郊外のトーンソン大学を会場に開催された。サントリー株式会社が前回のサンクトペテルブルグのコングレスに引き続き、スポンサーとなったこともあり、これに参加する機会を得た。

5月の末にしては異常に気温が低く、ホテルからはとりあえず重ね着をして出かけた。ところがコングレスが始まると参加者の方々の熱気には圧倒されるものがあった。トーンソン大学の芸術センターが主会場で、同大学のエレヌ・ブレッジーレさんがエグゼクティブ・ディレクターを務め、大学として州をも巻き込んでこのイベントに取り組んでいた。お揃いの黄色のTシャツを着たボランティアのスタッフが、会場での受付、誘導、会場とメインホテルとの間のシャトル運転と、きびきびと動きまわっていたのが印象的。前夜祭的に開会セレモニーとレセプションがあり、翌日からは、朝は8時30分から、夕方6時まで精力的なプログラムが組まれていた。シンポジウム、マスタークラス、ワークショップ、夜は場所を移してのコンサートと、ひとときもゆっくりさせてくれないほど極めて盛りだくさん。日本からは、堤剛日本チェロ協会会長のほか、岩崎流さんがプロとして参加、また桐朋学園の桐朋チェロアンサンブルも参加されていた。

チェロを演奏される方は、メインのコンサートホールで開催された、マスタークラスに興味を持たれたことと思う。大ベテランでJCSでもおなじみのバーナード・グリーンハウスさんは、ユーモアを織りまぜて、受講者をリラックスさせながら巧みに進めていった。とくに、大会の名誉会長であるヤーノシュ・シュタルケルさんとお二人で受講生一人を教えるというマスタークラスの時は、両マエストロの呼吸がぴったり合い、聴講しているほうも大変楽しい時間を共有することができた。また、ヨーヨー・マさんが講師となった時は、自身も客席内に降りて受講生の演奏を聴いたり、舞台上からは会場の聴講者の方に向けて、質問を飛ばしてくるといった形で、舞台上と客席を一つの輪にして盛り上げていた。それぞれの教授陣の個性が光るマスタークラスであった。

ワークショップの一つに、ジャズの即興演奏をユージン・フリーセンさんがプレゼンターになって20名ほどの参加者をリードし、指名されたり希望したりした参加者が、その場で指示に従って即興演奏を試みるというものがあった。われわれはこれをスクリーンを通して見るのであるが、うまくエンディングすると、「ハァ、うまいものだ」と思わず口にしてしまうほどだった。聴講者は、それをメイン・コンサートホールのスクリーンに映し出される画面で見るといった方式をとっていた。

また、シンポジウムの一つのテーマに、アメリカ各地のチェロ協会の主な活動について耳にするチャンスがあった。こういった組織では、会員と相互間の情報の共有が大切であり、可能であれば、いつでも集まれる場所があることが望ましいとの話があった。

この大会は国、民族、世代、プロ、アマ、関連の業者といった垣根を超えて、チェロを通して数日間を過ごすという楽しい催しであった。たまたま、教育の研究のためアメリカに留学しているという日本人の方と会場内で一緒に過ごす機会が何度かあったのだが、ご本人はギターをやったことがあるが、このコングレスに

参加して何日間も身近にチェロと接していたので、自分もチェロをやってみたくなると話していた。

私自身もこれだけ「チェロ尽くし」の日々を過ごしたのは初めてであるが、チェロはやはり人の心を捉えて放さない魅力を持つ楽器だという思いを強くした数日間であった。

All That Cello!

～第3回ワールド・チェロ・コングレスに参加して～

箕口一美(R-174)

およそチェロという楽器とつき合っている人すべてが「あるといいなあ」と思っていたことを7日間に凝縮してみました——アメリカ・メリーランド州ボルティモア郊外のトーンソン大学で行われた第3回ワールド・チェロ・コングレスを一言でいうとそんな感じです。朝8時半から始まる各種シンポジウムとマスタークラス、午後は往年の名手たちの貴重な記録映像の公開や民族音楽やジャズでのチェロを取り上げるセッション。楽器や弓の作り手による展示即売、修理アドバイスを連日行われ、珍しいものもあるチェロレパートリーの楽譜コーナーはかなりの充実。夜はマスタークラスの先生たちによる演奏会——なーんだ、先生か……？ ええ、シュタルケルとか、マとか、グットマンとか、ゲリンガス、とか堤さんとか岩崎さんとかいう先生たちでしたが……。公式パンフを改めて見ていると、目眩い感じがします。実際早起きして、シンポジウムに出席し、その後シュタルケル氏とグリーンハウス氏のマスタークラスを見学すると、もうそれだけで「お腹一杯」なのに、夜はボルティモア市内へ会場を移し、ボルティモア響とヨーヨー・マによる新作初演。こんな調子で7日間続くのですから、チェロを愛する人間には応えられないお祭りです。

最終日はプロもアマチュアも一緒にステージに上がり、200+αのチェロアンサンブルを中心とした演奏会。日本から参加した桐朋学園大学の学生たちのアンサンブルと、韓国の学生であるビーハウス・チェロアンサンブルによる演奏に続き、200+αのチェロたちがボルティモア響本拠のマイヤホフホールのステージを埋め尽くします。白眉はグリーンハウス氏のソロに、すべてのチェリストが心を合わせて従った《鳥の歌》でした。今回のコングレスでもアドバイザーとして活躍したグリーンハウス翁は、一同に会したチェロ弾きみんなの祖父のように融通無碍な鳥の飛翔を聞かせてくれました。

チェロ弾きたちだけのコングレスかというところでもありません。400人近い「一般参加」のうち、半分近くが「ただチェロを楽しみに来ている」お客さんたち。そのほとんどが学生たちと一緒に大学内の学寮に泊まり込んで、朝から晩までチェロに浸かっていました。夜の演奏会では出番のない先生は当然客席に。ふと気づくと隣はあのサラ・ネルソヴァ女史！ 目の前はシュタルケル氏!! 狭いロビーでぶつかって「あ、ごめん」と見れば、マ氏だった……(すみませんね、ミーハーで)。アマもプロも単なる客も、チェロが好きなら、同じ平面にいる——そんな雰囲気を楽しみながら過ごした7日間でした。毎日「今年最高の思い出」と言いたくなるようなことが起きて、本当に書き切れません。

コングレスの公式ホームページが詳細な報告書載せていますので、ぜひそちらをご覧ください。アドレスは、

<http://www.towson.edu/~breazeal/cello.htm>

日本チェロ協会と私

児 玉 真

カザルスホールに13年いて、その間、多くのチェリストと仕事をしてきた。チェロの演奏会だけでも90回近く行っただろう。それ以外にも弦楽四重奏等の室内楽を多くやってきたから、チェリストとのつきあいはかなりの機会になる。しかし、これらは、どちらかというとプロデュースをする立場として、チェリストの芸術家としての面、たとえば、競争原理の働く厳しい場所としてコンサートを作るようなケースが多かったように思う。

96年に契機があった。徳永兼一郎さんの死である。その前年、最後かもしれないという予感を胸に〈チェロ連続リサイタル〉に出演していただいた。病気の様子ではキャンセルがあるかもしれない演奏家に一夕を任せることは、企画者としては冒険である。しかし、このときはそのことをほとんど考えなかった。私の精神の中では新しい扉だった。

96年の〈チェロ連続リサイタル〉の直後に「徳永兼一郎を忍ぶ会」をヴォーリズホールで行い、多くのチェリストが来て、一曲ずつ演奏してくださった。その場のある感銘の故に、最後の挨拶で、「こうして徳永さんのために集まってくださったことを無駄にしないように何かを考えたい」とおもわず発言をしてしまった。

もう一つの契機は、1997年1月、ハレー・ストリング・クァルテットの共演者として、アメリカのバーナード・グリーンハウス氏を招聘したことだ。そのとき考えたのは、小さな教育的セッションともいうべきマスタークラスで、若いクァルテットとヴィオラ奏者がグリーンハウス氏と3日間、一緒にブラームスの六重奏曲を練習し発表するというもの。この3日間の練習が素晴らしかった。練習のたびに若い人たちが高揚していき、それと分かるほど目の色が変わっていったのだ。彼のオーラにあてられたのだろう。彼は天性の教育者であって、私も「SHINにはきっとできる」などと何度も言われるとまったくその気になってしまうのだった。

そんなこともあり、カザルスホール10周年を機に、社内で説得するチャンスを見だし、一度は堤さんにお断りしたチェロ協会の事務局をアウフタクトで引き受ける件が日の目を見ることになったのだ。

チェロが好きなたちがみんな仲良く何かをしていこうということと、チェリストの才能を見極める努力を怠ってはいけないうプロデューサーとしての仕事を、気持ちの上で両立させるのは思いのほか困難なことかもしれない。しかし、チェロ協会に関わってそのジレンマを感じたことはほとんどない。それが、チェロという楽器とチェリストという人種の不思議な魅力なのだと思う。

今回、アウフタクトの消滅で、事務局をサントリーホールにお任せすることになったが、私のようにチェロを弾けない会員は、別の形で楽しませてもらいたいものだと思っている。
(前日本チェロ協会事務局長)

マスタークラスの開催について

ボリス・ペルガメンシコフ

チェロマスタークラス受講生募集！

ボリス・ペルガメンシコフ氏によるマスタークラスを下記の日程で開催いたします。

受講・聴講ともに受け付けておりますので、ご希望の方は下記の要領でお申し込みください。

日 時：2000年9月14日(木) 17時から(開場16時30分)

場 所：サントリーホール 小ホール

受講者数：3名(一人約45分)

主 催：日本チェロ協会

協 力：神原音楽事務所・サントリーホール

問 合 せ：日本チェロ協会 03-3505-1001

◆受講希望者

応募方法：同封の申込み用紙に記入後、日本チェロ協会事務局に郵送もしくはFAXしてください。

締切後、評議委員による選考の結果を電話またはFAXにてご連絡いたします。

応募締切：8月25日(金)必着

応募資格：プロのチェロ奏者、または音楽学校在学中でチェロを専攻し、将来プロを目指している方。協会会員以

外の方の受講もお受け致しますので、お知り合いの方にもご吹聴ください。(年齢制限はありません)

受講料：無料

受講曲：最近特に熱心に取り組んでいる曲で、マスタークラスを受けるに十分な準備ができている曲を2曲まで選んでください。受講が決まった場合、講師用の楽譜をご用意ください。

※交通費・宿泊費・共演者の謝礼は受講者の負担となりますので、ご了承ください。

◆聴講希望者

FAXにて聴講希望の旨、9月11日(月)まで事務局宛にご連絡ください。(会員番号・お名前・連絡先がわかれば、用紙はなくても結構です)聴講料は無料です。

〈ボリス・ペルガメンシコフ氏 略歴〉

1948年にロシアで生まれ、1966年にレニングラード音楽院に入學し、エマヌエル・フィッシュマンに師事、1972年卒業した。1969年全ロシア音楽コンクール、全ソヴィエト音楽コンクールで第1位、1970年「ブラハの春」国際音楽コンクールのチェロ部門で第1位を獲得。1974年第5回チャイコフスキー国際コンクールで第1位及び金賞を受賞し、国際派チェリストとしての地位を確かなものとした。

1977年、西側へ移住と同時に世界規模の演奏活動をますます盛んに行うようになった。現在は、ベルリン・ハンス・アイスラー高等音楽院で教鞭をとっている。

情報コーナー

○堀了介チェロ・リサイタル

9月21日(木)19:00開演 カザルスホール
 ベートーヴェン:チェロ・ソナタ第5番 ニ長調
 ショスタコーヴィチ:チェロ・ソナタ ニ短調
 フランク:チェロ・ソナタ イ長調
 〈出 演〉仲道郁代(ピアノ)
 〈入場料〉S席:6,000円 A席:5,000円
 〈主 催〉神原音楽事務所 03-3586-8771

○堤剛プロデュース 2000

10月17日(火)・18日(水)両日共19:00開演
 サントリーホール 小ホール
17日 プラームス:チェロ・ソナタ第1番 ホ短調
 :チェロ・ソナタニ長調「雨の歌」
 :チェロ・ソナタ第2番 ヘ長調
18日 メンデルスゾーン:チェロ・ソナタ第1番 変ロ長調
 :協奏の変奏曲
 :チェロ・ソナタ第2番 ニ長調
 〈出 演〉練本繁夫(ピアノ)
 〈入場料〉指定席:4,000円 学生席:1,000円 セット券:7,000円
 〈主 催〉サントリーホール 03-3584-9999

○山崎伸子 無伴奏チェロ・リサイタル

10月23日(月) 19:00開演 東京オペラシティ リサイタルホール
 レーガー:チェロ組曲第1番 ト長調
 J.S.バッハ:無伴奏チェロ組曲第5番 ハ短調
 コダーイ:無伴奏チェロ・ソナタ
 〈入場料〉全自由席:4,000円
 〈主 催〉梶本音楽事務所 03-3289-9999

○松浦ふさ代&岩崎淑 デュオリサイタル

11月10日(金)18:30開演 鳥取市文化ホール
 ベートーヴェン:チェロ・ソナタ第2番
 ラフマニノフ:チェロ・ソナタ ト短調 他
 〈入場料〉大人:2,500円(当日3,000円) 高校生以下:1,500円
 〈主 催〉ゴースの会
 〈問い合わせ先〉0857-22-5008(松浦)

○ミツシャ・マイスキー(Vc)マルタ・アルゲリッチ(Pf)デュオリサイタル

11月8日(水)19:00開演 サントリーホール 大ホール
 発売日及び詳細未定
 〈入場料〉S席:12,000円 A席:10,000円 B席:8,000円
 C席:6,000円
 〈主 催〉梶本音楽事務所 03-3289-9999

○サントリーホール ニューアーティストシリーズ67

ラファウ・クフィアトコフスキ チェロ・リサイタル
 12月14日(木)19:00開演 サントリーホール 小ホール
 ベートーヴェン:チェロ・ソナタ第4番 ハ長調
 ショパン:チェロ・ソナタ ト短調
 ショスタコーヴィチ:チェロ・ソナタ ニ短調
 〈出 演〉グジェゴシ・ゴルチツァ(ピアノ)
 〈入場料〉自由席:3,000円 学生席:1,000円
 〈主 催〉サントリーホール 03-3584-9999

事務局より

○年会費納入時期の変更に関して

これまで、各会員の入会月にあわせて年会費の振り込みをお願いしておりましたが、2001年より4月に一括で納入していた

だく方法に変更させていただくことになりました。

つきましては、2000年を移行期として以下のように会費の入金額を調整させていただきますので、お間違えのないようにお気を付けください。

4～6月入会者	10,000円
7～9月	7,500円
10～12月	5,000円
1～3月	2,500円

2001年度からは4月に全会員より10,000円をご入金いただく形に統一します。

※ 前年度までの会費が未納の方は、同封しました振込のご案内を確認の上、8月末日までに記載の口座へ入金をお願いいたします。

○振込み銀行変更のお知らせ

前回のニュースレターにてご連絡しました通り、支店統合及び事務局の移転により口座を変更させていただきました。今後のお振り込みは下記の新口座へお願いいたします。

新口座：富士銀行 神谷町支店 普通預金 2712673
 さくら銀行 赤坂支店 普通預金 7909038
 口座名：日本チェロ協会(ニホンチェロキョウカイ)

なお、これまでの振込み先であった住友銀行と富士銀行お茶の水支店の口座は閉めさせていただきますのでご了承ください。

○チェロサロンのお知らせ

9月を予定しておりましたチェロサロンですが、会場その他の都合により、11月に変更させていただきます。日時は以下の通りです。

日 時：11月26日(日) 18:00～
 場 所：サントリーホール リハーサル室
 参加費：無料
 主宰者：上村 昇氏

ふだん疑問に思っていることにその場でお答えします。アンサンブル参加の方は初見でも弾けるような楽譜をお持ちください。参加をご希望の方は、10月20日(金)までに事務局宛にご連絡ください。

○JCSホームページ作成に関して

長らくお待ちしておりますチェロ協会のホームページですが、秋をめどに立ち上げ準備に取りかかります。内容に関して、アイデアを募集していますので、ぜひ、皆様のご意見・ご要望をお聞かせください。

また、ホームページ作成にあたってアドバイザーを探しております。皆様ご多忙とは存じますが、詳しい方でご協力をいただける方がいらっしゃいましたら、事務局までご連絡いただけますでしょうか。どうぞよろしくお願いいたします!

日本チェロ協会会報(JCS NEWS)第9号

2000年7月31日発行

発 行：日本チェロ協会

東京都港区赤坂1-13-1 サントリーホール内

電話 03-3505-1001 FAX 03-3505-1007

発行人：堤 剛

編 集：日本チェロ協会事務局

編集協力：リュウカンパニー